　© 不許複製禁転載

［A］室町幕府の職制－テキストP26対応－

1338年に足利尊氏が征夷大将軍に任命されたことによって，室町幕府が成立した。でも，その頃は南北朝の動乱(1336～1392)の真っ只中だったから，戦いの最中に幕府の職制を整えている暇はない。そのため，室町幕府が開かれた当初は，軍事関係を担当する兄の足利尊氏と，政治関係を担当する弟の足利直義が協力して，政治を分担する二頭政治というものがとられていたんだ。つまり，室町幕府初期の頃は，ほとんどその場しのぎ的な機構でしかなかったわけだね。じゃあ，いつ頃その職制が整っていたかというと，南北朝の動乱も落ち着き始めた3代将軍足利義満の頃だったんだ。

では，室町幕府の職制の具体的な中身を説明していこう。室町幕府のトップは当然将軍で，基本的には将軍自ら政治を行う形をとる。でも，さすがに一人で全てを解決できるわけないので，その将軍の補佐役である管領という役職が置かれているんだ(南北朝の動乱期に高師直が務めていた執事が後に管領となった)。つまり，室町幕府の管領とは，鎌倉時代の執権みたいなもの。ただし，執権ほど権力は強くないよ？ほら，そもそも鎌倉幕府の場合は，源氏将軍の血筋が断絶しちゃった後，執権である北条氏が権力を握っちゃったでしょ？

そこで，こういった権力が一つの勢力に固まらないように細川・斯波・畠山という足利氏一門の三つの家柄から，この管領をそれぞれ交代で任命したんだ(この管領に任命される三つの家柄を三管領という)。ただし，畠山の「畠」という字に気をつけてね，上は「自」ではなく「白」になっているからね。

そして，この管領の下に置かれたのが侍所・政所・問注所だ。こうしてみると，「なんだ，鎌倉幕府と同じ名前じゃん」って思うよね？しかし，気をつけるように。名前は鎌倉幕府と同じだけど，担当する役割が鎌倉幕府とは全然違うんだ。

＜四職の覚え方＞
「京の山は赤一色」
→京(京極)の山(山名)は赤(赤松)一色(一色)

まず，鎌倉幕府の侍所は御家人を統率する機関だったけど，室町幕府の侍所は幕府のある京都の警備や裁判を行う。その侍所の長官を所司と言うんだけど，その所司に任命される家柄も，この場合は4つあるんだ。その4つの家柄を四職と言って，それが京極・山名・赤松・一色の4家だ。そして，この所司になった場合，京都のある山城国の守護も兼任することになるんだ。そもそも，侍所は京都を警備するわけだから，京都がある山城国守護も兼任するに決まっているよね。

それから，幕府の財政を担当するのが政所だ。鎌倉幕府の政所は幕府の政務一般を担当する役職だったよね。つまり，鎌倉幕府の政所は「政治」を行う役職だったけど，室町幕府の政所は財政を扱うという「経済」担当の役割に変わっているわけだね。この政所の長官を執事って言うんだけど，実はこれを聞いてくるのではなく，その長官に任命された家柄を聞いてくることも極稀にある。その政所の執事に任命されたのが建武式目の時の中原(二階堂)是円の子孫かとも言われている二階堂氏で，その後に伊勢氏へと変わったんだけど，これらは完全にマニアックなもので，まったく問われない。

そして，最後が記録した文書の管理にあたる問注所。鎌倉時代の問注所は訴訟担当だったよね？でも，訴訟に関しては侍所の担当に移っちゃっているから，この機関は文書の保管係となったんだ。その長官である執事も特に聞かれないし，これ以外にも鎌倉幕府と同じように評定衆と引付衆があるけど，鎌倉幕府と何も変わってないから無視しておいてよい。

このように，室町幕府の政治体制は，将軍の足利氏と細川・斯波・畠山・京極・山名・赤松・一色などの有力守護大名が在京して幕政に参加する連合政権の形をとっていたんだ(守護在京制という)。そのため，1467年～1477年の応仁の乱後に幕府の権威が失墜して，守護大名の勢力が衰退すると，守護在京制による幕府の政治体制は崩壊してしまうんだけどね。

ここまでが中央，つまり京都にある機関のお話。それに対して，それ以外の地方に置かれた機関の話をしていこう。じゃあ，その地方の中で最も重要な地域ってどこだろう？

関東・東北・九州などいろいろあるけど，最も重要な地域はやっぱり関東，特に鎌倉。そもそも，関東は鎌倉幕府が存在した地でもあるし，1336 年の建武式目でも室町幕府を京都に置くか鎌倉に置くかで悩んでいたぐらいだからね。

＜建武式目(1336)＞

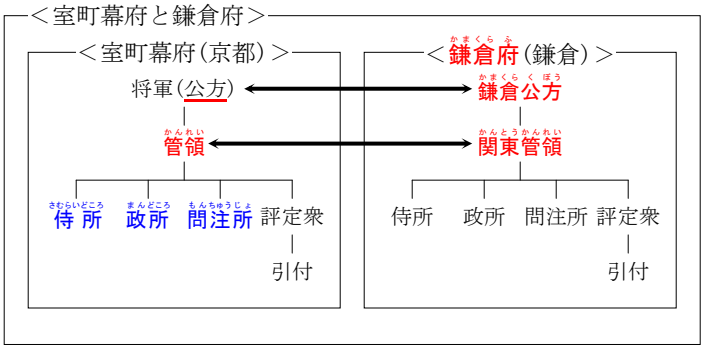
「鎌倉元の如く柳営(幕府の所在地)たるべきか，他所たるべきや否やの事」
(幕府の所在地を昔のように鎌倉におくべきか，それとも別の場所(京都)におくべきかについて)

そこで，関東 8 カ国と伊豆と甲斐の合計 10 カ国を統轄するために，鎌倉に設けられたのが鎌倉府という機関だ。伊豆国は現在の静岡県で，甲斐国は現在の山梨県だから，どちらも関東には含まれないでしょ？だから，関東 8 カ国にプラスする形で，伊豆・甲斐となっているわけだね。

そして，その後には東北地方の陸奥・出羽も加わる。だから，関東と東北の東日本をほとんど任されているのが鎌倉府っていうことになり，この鎌倉府には大きな権限が与えられていることがわかるはずだ。そのため，強大な権力を持っていた鎌倉府は京都の室町幕府としばしば対立することになる。例えば，1399 年の応永の乱に際して，大内義弘に呼応して挙兵しようとした 3 代鎌倉公方足利満兼がいるけど(学習院大のみ頻出)，その他の具体例は［室町幕府の動揺］で説明していこう。

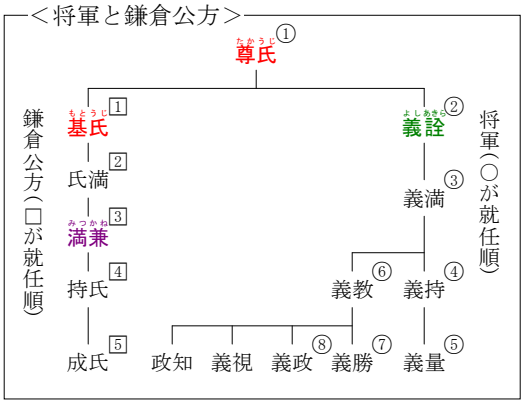
なお，この鎌倉府というものは右の図解を見てみるとよくわかるんだけど，いわば鎌倉にある第 2 の幕府，もしくは関東版幕府というもの(実際に鎌倉府は関東幕府と呼ばれてもいた)。

つまり，京都にある幕府が畿内などを治める機関であるのに対し，鎌倉にある鎌倉府が関東などを治める機関であったわけだ。



こうしてみると，幕府と鎌倉府の機構がそっくりなことがわかる。そもそも，鎌倉府自体が幕府の機構を真似して作られた機構であったしね。

その鎌倉府における長官を鎌倉公方(関東公方)と言うんだけど，これは幕府の将軍のことを公方とも呼ぶことから付けられた名前なんだ。つまり，鎌倉にいる第 2 の将軍ってことだね。この鎌倉公方の初代に任命されたのが，足利尊氏の子供である足利基氏だ(なお，基氏の兄にあたる義詮は 2 代将軍になっている)。だから，これ以降尊氏の子の義詮の子孫が将軍に就任して，基氏の子孫が鎌倉公方に就任していくんだ。



そして，その鎌倉公方を補佐するのが関東管領で，その関東管領をずっと代々世襲していったのが足利氏一門の上杉氏だ。つまり，室町幕府における将軍にあたる関東版将軍が「鎌倉公方」で，室町幕府における管領にあたる関東版管領が「関東管領」なわけだ。なお，この関東管領の下には侍所・政所・問注所・評定衆など京都の室町幕府と同じ役職があるんだけど，それらは問われない。

室町幕府は畿内を中心に統治する機関で，鎌倉府は関東を統治する機関。でも，さすがに九州などの遠国までも幕府が管轄するのには限界がある。そこで，東北地方には奥州探題・羽州探題，九州地方には九州探題，中国地方には西国探題などが設置されたんだ。

細かく説明すると，東北地方の陸奥国を治めるのが奥州探題(奥州とは陸奥の「奥」のこと)で，出羽国を治めるのが羽州探題(羽州とは出羽の「羽」のこと)なんだけど，これは勘のいい子なら気づくと思う。「あれ？陸奥・出羽って鎌倉府が治めるんじゃなかったの？」って質問が出てくるだろう。

その通り。ゆえに，僕はこう記した。「鎌倉府は“後に”陸奥・出羽を加えた国を治めるようになった」って。つまり，最初のうちは奥州探題と羽州探題が東北を治めていたんだけども，結局名前だけの存在で権力はなかったので，後にその管轄が鎌倉府に移ったわけだ。それゆえ，奥州探題と羽州探題は職名だけになっちゃったんだ。

さて，それに対して九州に置かれたのが九州探題。そもそも，九州といえば南北朝の動乱の頃，幕府の勢力が最も弱い地域で，南朝の征西将軍であった懐良親王が勢力を誇っていた。そこで，この九州を制圧するために，今川貞世(了俊)という人を初代九州探題に任命して，九州の制圧を行わせたんだ。ちなみに，文化史で扱う内容だけど，この今川貞世はその後に『難太平記』という書物を記しているので，ここで覚えておくといいかな(南北朝時代には，南北朝の動乱を題材にした軍記物語『太平記』が著されたが，この内容は南朝の立場から書かれたもので，南朝に同情的な記述が多かった。そのため，こうした『太平記』の誤りを訂正して今川貞世(了俊)が著したものが『難太平記』である)。

また，全国の国ごとには守護や地頭が置かれるんだけど，ちょっと不安な部分がある。この南北朝の動乱時は，刈田狼藉の取り締まり権や使節遵行権，半済令・守護請などの権限を行使して，各地で守護が勢力を拡大して守護大名へと成長していた頃だ。例えば，山陰地方などの 11 カ国の守護を兼任していた山名氏や周防・長門などの 6 カ国の守護を兼任していた大内氏といった有力守護大名がいたよね。

ゆえに，室町幕府自らが軍事力を持っておかないとやばい。いつ事件や反乱が起きたとしても対処できるように，将軍の直轄軍を備えておく必要がある。そこで，古くから将軍の側で仕える足利氏の御家人や守護の一族，有力な地方武士(国人)などを集めて奉公衆という室町幕府の直轄軍を整備したんだ。

そして，将軍の護衛にあたるとともに，いざ戦が起きたら直轄軍として出動するわけだ。ただし，戦が毎回起きるわけではないから，戦がない平時には，諸国に散らばっている御料所という幕府の直轄領を管理しているんだ。…と，いきなり御料所といわれてもピンとこないよね。それでは，この御料所など幕府の経済基盤について説明していこう。

［B］幕府の経済基盤－テキスト P26 対応－

御料所というのは，幕府の直轄領のことで，正確に言うと，室町幕府が所有している荘園や国衙領のことだ。つまり，幕府自体が各地に荘園・国衙領を持っていて，その領地から年貢・公事・夫役といった税を徴収して自分たちの収入にしているわけだ。でも，その御料所は全国いろんなところに散らばっているから，それを奉公衆が管理していて，その見返りに収入の一部を給料としてもらっているんだ。

ほら，鎌倉時代の鎌倉幕府は，自ら関東御領という荘園を 500 箇所持っていて，それを経済基盤としていたでしょ？同じように，室町幕府も御料所という自らの荘園を経済基盤にしているわけだ。ゆえに，室町幕府の御料所は「鎌倉幕府の関東御領にあたるもの」って考えてくれればいいんだけど，鎌倉幕府の関東御領と，室町幕府の御料所とでは，それぞれ「領」と「料」が違うので特に気をつけてほしい。

© 不許複製禁転載

さて，室町幕府もやはり荘園である御料所を財政基盤にしているわけだけど，実はその御料所の数は，わかっているだけでも 200 箇所ぐらいしかない。鎌倉幕府の関東御領が 500 箇所もあったにもかかわらず，この 200 箇所は少なすぎるよね？だから，これだけじゃ収入が足りないので，他のところからも各種の税金を徴収しているんだ。

鎌倉時代には日宋貿易によって宋銭が輸入され，また室町時代には日明貿易によって明銭が輸入され，日本にも貨幣経済が浸透するようになった。つまり，今までは商品の取引を物々交換で行っていたものが，貨幣による取引が行われるようになったということだ。そうなると，貨幣の需要が高まると，人々の中には金を貸して利益を儲ける金融業者（高利貸）などが生まれてくる。

こういった室町時代の金融業者のことを土倉とか酒屋というんだけど，こうした金融業者から徴収した税金が倉役（土倉役）と酒屋役だ（倉役は土倉から徴収する営業税で，酒屋役は酒屋から徴収した営業税）。ちなみに，この倉役・酒屋役を徴収する役職は，幕府の財政を担当する政所になる。

貨幣経済の浸透はもう一つの社会の変化を引き起こした。それが交通の発達だ。貨幣による取引が浸透すると，遠隔地における取引も活発化するため，遠い地域を結ぶために陸路とか海路とかの交通も発達していく。そこで，幕府はその交通の発達に目をつけて，交通の要所に関所を設けて関銭という通行税を徴収したり，港で津料とよばれる入港税を徴収したんだ。なお，関銭はそのままだから覚えられるだろうけど，津料については漢字の意味から考えれば覚えられる。「津」という漢字は，難波津などの重要な港を有する摂津国のように，「港」という意味だからね。

また，田地・家屋ごとに課した庶民に対する臨時税が段銭と棟別銭だ。これは，毎回徴収するというわけではなく，例えば天皇が即位する時の儀式や，内裏（皇居）を造営するなどの国家行事の際に課した臨時税にあたるもの。

じゃあ，具体的にどう違うのかというと，田んぼの面積は 1 段（反）とか 2 段（反）って表すよね？だから，段銭はこうした田んぼの 1 段ごとにかかる税だ。それに対して，家屋の表し方は 1 棟とか 2 棟って数えるでしょ？だから，棟別銭はこうした家屋の 1 棟ごとにかかる税だ。そして，こうした民衆は全国に住んでいるわけだから，税を徴収するためにわざわざ役人を派遣するのは効率が悪い。そのため，各国にいる守護がその徴収にあたったんだ。

それから，室町幕府の財政基盤の大きな財源となっていたのが日明貿易だ。基本的に日明貿易は幕府が行うんだけど，幕府が自ら行う場合もあれば，幕府から任された商人が行う場合もある。そこで，その日明貿易を任せられた商人から，輸入した額の 1 割を徴収するのが抽分銭。

この他にも，こののちには，債務者（借金をしている者）から，もしくは債権者（借金を貸している者）から借金の額の 10 分の 1 ないし 5 分の 1 の手数料として分一銭を支払えば，徳政令を出してやったり，その徳政令の対象から免除してやるという方法で収入を確保していくようにもなったんだ。ただし，これらが出されるようになった背景は，土一揆の項目で解説していこう。

［C］室町幕府の動揺（足利義持～足利義勝）－テキスト P32 対応－

それでは 3 代将軍足利義満以降の室町幕府の展開をみていこう。3 代将軍義満は南北朝を合一させたり，鹿苑寺金閣を建立したり，日明貿易を開始したり，幕府権力を確立したカリスマ的な存在。

そして，義満は長男の足利義持をあまり可愛がらずに，その義持の異母弟にあたる義嗣ばかりを可愛がっていた。ところが，1408 年に義満は 51 歳で急死してしまったため，次の 4 代将軍には足利義持が長男として就任することになったんだ。

義嗣としてみれば，もしかして自分が将軍に就くことができるかもしれないと期待していたわけだけど，親父の義満が急死してしまったために，将軍に就ける可能性がなくなってしまったわけだ。そのため，義嗣はやる気を失って陰鬱な日々を過ごしていくようになった。

そんな折，京都ではなく関東でも同じように不満を持っている人間がいた…。それが前関東管領の上杉禅秀という人物だったんだ。

＜上杉禅秀の乱（1416）＞

当時の鎌倉府は 4 代鎌倉公方である足利持氏が実権を握っていた。この足利持氏という人物は，一言でいうならば「DQN」だ。良くいえば，ジャイアニズムの象徴的な存在，自分勝手で傲慢な性格。そして，1415 年には，今まで自分の補佐役として関東管領を務めていた上杉禅秀（氏憲）をいきなりクビにして，上杉憲基という人物を新しい関東管領に就けたんだ（関東管領の上杉氏は山内・扇谷・犬懸・宅間の 4 家に分かれ，それぞれ交代で関東管領に任命されていた）。

上杉禅秀は犬懸上杉氏の出身で，新しい上杉憲基は山内上杉氏の出身であり，2 人はライバル関係にあった存在。だから，禅秀からしてみれば不満タラタラ。そして，京都には将軍になれなかった足利義嗣も，4 代将軍の足利義持に不満を持っている…。そこで，この義嗣と結んで，鎌倉公方足利持氏を倒そうと反乱を起こしたんだ。それが 1416 年の上杉禅秀の乱だ。しかし，結局足利持氏と幕府側の派遣した援軍によって鎮圧されてしまい，禅秀は自殺，そして義嗣も相国寺に閉じ込められてしまったんだ。

＜上杉禅秀の乱の覚え方＞
「石拾う禅秀」
→い（1）し（4）ひ（1）ろ（4）う 禅秀

この時点で，それぞれの役職で混乱した子もいるんじゃないかな？この後の室町幕府の展開を理解するためには，室町幕府の職制をちゃんと理解しておかないと誰が誰なのかわからなくなってしまう。すでに「［A］室町幕府の職制」で説明した部分だけど，もう一回確認しておこう。

京都を中心とした室町幕府のトップが将軍で，関東を中心とした鎌倉府のトップは鎌倉公方（関東公方）と言ったよね。そして，その当時の将軍には足利義持が，鎌倉公方には「DQN」足利持氏が就いているわけだね（鎌倉公方に就任する人物は，基本的に将軍の名前から一文字もらうのが慣習になっていたため，義持の「持」をもらって，「持」氏と名乗った）。そして，将軍にはその補佐役の管領がいて，鎌倉公方の補佐役には関東管領がいるんだったね。そして，その関東管領を務めていた上杉禅秀（氏憲）が，鎌倉公方の持氏により罷免され上杉憲基がその職に就いたことに反発し，彼が反乱を起こしたわけだ。

＜室町幕府と鎌倉府＞

＜室町幕府（京都）＞
将軍（足利義持）
｜
管領（細川・斯波・畠山氏から任命）

＜鎌倉府（鎌倉）＞
鎌倉公方（足利持氏）
｜
関東管領（上杉氏から任命）＝上杉禅秀→上杉憲基（罷免）
反乱

関東で起きた上杉禅秀の乱に関しては，因果関係としてつながるものがほとんどない。だから，この事件は，4代鎌倉公方である「DQN」持氏のジャイアニズム的な性格を表した事件と考えてくれるといいかな(それぞれの人物に対するイメージとして，僕は勝手にあだ名をつけている)。

一方，4代将軍である足利義持が治める京都では，特に大きな反乱などは起きずに比較的穏やかな時代が続いていた。でも，実はこの足利義持自体にはそこまで権力がなかった。先ほども言ったように，彼の親父は3代将軍である足利義満だよね？義満は南北朝の合一を成し遂げ，武家の頂点である征夷大将軍だけでなく，公家の頂点である太政大臣にもなった超カリスマだ。でも，こういうカリスマを親父に持つ子供ほど可哀そうなものはないんだよね。その親父と比べられてしまうからだ(長嶋茂雄の子の長嶋一茂や，源頼朝の子の源頼家，武田信玄の子の武田勝頼などは典型的な例)。

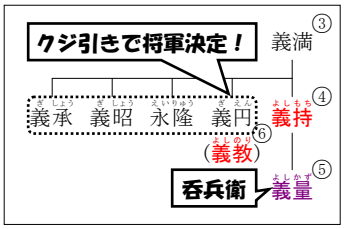
義満はカリスマなので，家臣にあたる管領たちも素直に従っていた。でも，義持はカリスマの子供に過ぎないため，管領たちは義持にはあまり従わず，言いたい放題言うようになっていく。その結果，管領などに圧力をかけられてしまい，義持は自分のやりたいように政治をおこなうことが出来ないでいたんだ。これは，面白くないよね。そこで，「それなら，もう将軍はやめて息子にでも譲るか」ってことで，将軍を辞めて息子の足利義量に将軍職を譲ることにしたんだ。

ところが，この義量…，体が弱いくせにめちゃめちゃ酒好きで2年後に19歳で死んでしまった(あだ名は呑兵衛義量としよう)。しょうがないので，この後もう一回義持が将軍を務めることになったんだけど，やっぱり，また管領が口出ししてきちゃって自ら政治をすることはできなかったんだ。そのため，義持は酒を飲むようになって体を壊し，最終的に病気になって死んでしまいましたとさ…，ちゃんちゃん。

しかーし！この死の間際になっても，義持は次の将軍職を誰にするかを決定しなかった。おそらく「たとえ，俺が次の将軍を決定したとしても，管領たちに反対されればそれも退けられてしまうだろう」みたいなことでも考えていたんじゃないかな。そして，そのまま次の将軍後継者を決定しないまま義持は亡くなっていったんだ。これは家臣たちも困った。家臣にとって重要なことは，次の将軍を誰にするかなのに，結局義持は次の将軍を決定せずに死んでしまった。そのため，家臣たちは皆で集まって次の将軍を誰にするかを話し合ったんだ。

義持の子供の義量は死んでしまったけど，幸いにも義持には弟が4人いた。まあ，その4人とも皆出家してしまってはいるんだけど…(単独相続が一般化していたこの当時，将軍に就けなかった兄弟は僧侶になることが多かった)。それならば，その4人の中から一人選んで，還俗(僧侶から一般人に戻ること)させて将軍に就任してもらえばいい。でも，勝手に決めちゃったら残りの3人から反発がくるかもしれないよね。そこで，前代未聞のことだけど，公平にクジ引きで将軍を決めることにした(クジ引きは神様の意志であり，神聖なものと考えられている)。

結果，当時天台座主(天台宗僧侶の最高職)であった義円という人物が将軍後継者に決まった(実は，このクジは仕組まれていたと言われている)。そこで，管領たちは次の将軍になってくれるよう義円に頼みに行った。しかし，義円は簡単にはオーケーしてくれない。なぜなら，自分の兄貴である義持がそこにいる管領たちのせいで好きなように政治が出来なかったことを知っているからだ。そこで，義円は「俺が将軍になる場合は，細川・斯波・畠山ら管領は文句を言わないこと」という条件を出したんだ。



こうして，管領たちは要求を受け入れて，義円の将軍就任が決定した。そして，義円が坊主から髪を伸ばして(正確には俗世間に還ることから還俗という)，足利義教と名乗り6代将軍に就任したんだ。そのため，彼のことをよく「クジ引き将軍」とか「還俗将軍」なんて呼んだりする。

さて，「クジ引き将軍」・「還俗将軍」と呼ばれた 6 代将軍足利義教には，新しくあだ名をつける必要がない。「切れたナイフ（出川哲郎の高校時代のあだ名）」や，「発作マン（号泣議員野々村竜太郎の中学時代のあだ名）」といったものも良いけど，「悪御所」・「万人恐怖」という有名なあだ名があるからね。どれだけメチャメチャだったかというと，以下に列挙してみよう。

＜「万人恐怖」足利義教＞

①酌が下手な侍女を，殴って髪を切って尼さんにしちゃう
②儀式で笑顔を浮かべた公家を，自分のことを笑ったと思って所領没収・蟄居
③闘鶏を見物する客が多く自分の行列が通れなかったため，鶏を京都から追放
④自分の古巣である比叡山延暦寺を焼き討ち
⑤比叡山延暦寺の焼き討ちについて噂していた庶民を処刑
⑥義教を諫めようと『立正治国論』を著した日蓮宗僧侶の日親を拷問
　→熱した鍋を頭にかぶせられたことから，日親は「鍋かぶり上人」と呼ばれる

〔足利義教〕

うん，サイコパス。「サイコパス」義教としておこう。…一方，「サイコパス」義教が 6 代将軍に就任したことに対して，関東でブチ切れていた人物がいた。

それが先ほど出てきたジャイアニズムの象徴，4 代鎌倉公方「DQN」持氏だ。そもそも 4 代将軍の義持が死んだ時点では，義教を含む 4 人の兄弟は全員坊主だったわけだよね。でも，その時に鎌倉公方だった足利持氏だけは，ただ一人坊主ではない。だから「義持が死んだら，それ以外の弟は全員坊主になっているし，次の将軍はたぶん俺が呼ばれることになるだろう」と，将軍に就任することを期待しまくっていたんだ。

〔足利持氏〕
（イメージ図）

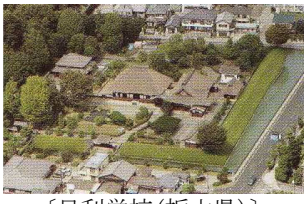
ところが，なぜか坊主の義教が還俗して将軍に就任した。これには持氏もブチ切れだ（実際には，管領たちは傲慢な持氏を将軍に就けることに反対していたため，義円（義教）に将軍職の就任を頼んだわけだけどね）。だから，持氏からしてみれば，

「ふっざけんなよ，俺以外は全員ハゲじゃねえか!!!!!!（問題はそこじゃない）
　フサフサの俺を差し置いて，何でクソ坊主が将軍になんだ!!!!（あなたが DQN だからでしょう）」
　こんなん認められるか。こうなったら，戦だ，戦!!!!!!」

と戦争の準備を始めたんだ。ところが，この持氏に対して，

「持氏様，今はちゃんと冷静になって落ち着くべきです」

と，彼をたしなめる人物がいた。それが関東管領の上杉憲実という人だ。彼は下野国（栃木県）の足利学校を再興したことでも知られる教育者であり人格者。その憲実にたしなめられたことによって，ようやく持氏も落ち着きを取り戻し，何とか戦争をするのは避けられたんだ。


〔足利学校（栃木県）〕

＜上杉憲実の人物像＞

4 代鎌倉公方足利持氏の補佐役として関東管領を務めていた上杉憲実は，忠義心に厚い人物であったと僕は考えている。ただ，運が悪かったのは，20 年ほど仕えていた主君が「DQN」持氏であったことと，室町幕府の将軍が「万人恐怖」義教であったこと。

その持氏・義教の両者が何度も対立するたびに，調停・融和していたのが上杉憲実だったんだ。でも，1438 年にその対立は沸点に到達し，上杉憲実は足利義教と共に「DQN」持氏を討伐することになる（これを永享の乱という）。

その後，「主君を裏切った」という気持ちに苦しんだ上杉憲実は関東管領を辞職し，1439 年に下野国（栃木県）にあった足利学校を再興している。この学校は，戦国時代には各地から学生が訪れて生徒数は 3000 人を超え，フランシスコ・ザビエルから「坂東の大学」と評されるまでになるんだ。

京都には将軍の「サイコパス」義教，関東には鎌倉公方の「DQN」持氏…，これは将来的に必ず衝突が起きるだろうね。実は，この後も義教と持氏は，互いに滅ぼしてやろうと何度も挙兵しようとしている。でも，そのたびに京都では管領たちが将軍の義教をなだめて，関東では関東管領の上杉憲実が鎌倉公方の持氏はなだめることによって，何とか 10 年近く全面戦争は回避されていたんだ。

＜室町幕府と鎌倉府の対立＞

＜室町幕府（京都）＞
将軍（足利義教）＝**サイコパス**
↑**なだめる**
管領（細川・斯波・畠山氏）

対立

＜鎌倉府（鎌倉）＞
鎌倉公方（足利持氏）＝**DQN**
↑**なだめる**
関東管領（上杉憲実）

ところが，その争いがついに頂点に達してしまう事件が起きてしまう。1438 年，持氏の子供が元服する年齢になった。元服すると，新しい名前をもらうんだけど，この当時は鎌倉公方の子供の元服名には，当時の将軍の名前から一字もらうという慣習があったんだ。例えば，3 代将軍の義満から，2 代鎌倉公方氏満・3 代鎌倉公方満兼は「満」の字をもらい，4 代将軍の義持から 4 代鎌倉公方持氏は「持」をもらっているからね（これを知っていると鎌倉公方の人物名は覚えやすくなると思う）。

つまり，持氏の子供には，本来なら義教の「教」という字をもらって「教氏」と名付けるべき。でも，持氏は「嫌だね。何であんな奴の字を何で自分の子供につけなきゃいけねえんだよ」と拒否して，「義久」という違う名前をつけてしまった。

これはマズい…。このことを将軍の義教が知ったら，彼の「サイコパス」が発動してしまう。そこで，上杉憲実は持氏を諫めようとしたんだけど，いろいろ苦言を呈されていたことで，持氏もついに逆ギレ。しまいには，「DQN」持氏が上杉憲実を暗殺するのではないか，いわゆる某国で有名な粛清が行われるのではという噂まで流れる…。このままでは，自分も殺されるかもしれない。そのため，身の危険を感じた上杉憲実は，持氏のいる鎌倉から出奔して，自分の故郷の上野国（現在の群馬県）へと逃れたんだ。

〔足利持氏（イメージ図）〕

さあ，関東の将軍様「DQN」持氏のお怒りは頂点だ！こうして，1438 年に足利持氏が上杉憲実を殺そうと兵を挙げることになる（これを永享の乱という）。

＜永享の乱の覚え方＞
「いよっ，ミーハーの影響だな」
→い　よっ，ミーハーの影響
　1　4　　3　8　　永享

一方，室町幕府の将軍様「サイコパス」義教も，今こそが持氏を倒すチャンスだと考え，上杉憲実を助ける形で兵を挙げることになる。そして，義教軍と憲実軍に追い詰められた持氏は，翌年の 1439 年に鎮圧されることになるんだ。

持氏が鎌倉で自害したことによって永享の乱は幕を閉じたんだけど，持氏の残された遺児たちはどうなるんだろう。サイコパス「義教」が持氏の子供を許してくれるわけはないだろうし，彼らには殺される運命が待っていたんだ。でも，年齢的には 10 歳にも満たない子供たちを殺すなんて可哀想すぎる。

そこで，この足利持氏の遺児を擁して，下総の結城氏朝という人物が 1440 年に反乱を起こしたんだけど，結局これも幕府と上杉憲実軍によって鎮圧されてしまったんだ。これを結城合戦という（唯一，持氏の遺児として生き残った成氏は関東を転々と逃げ回り，最終的に義教が死んだ後に鎌倉公方として戻ってくることになる）。こうして，鎌倉公方が滅ぼされたため，鎌倉府の実権は関東管領の上杉氏に移っていったんだ。

さて，話を「サイコパス」義教に戻していこう。永享の乱を鎮圧した足利義教が目指していたのは，父である足利義満の頃のような幕府権威の回復だ。兄である義持の頃は管領の言いなりになったり，将軍の権威が落ちていたからね。そこで，先ほど管領たちに「自分のやりたい放題やらせてもらう」と忠誠を誓わせたように，将軍による専制政治を進めていき，将軍よりも力を持つ可能性がある有力守護大名の抑圧に乗り出したんだ(こうしてみると，義満の政策に似ている部分が多いよね)。そして，結城合戦の後も，一色氏や土岐氏などの有力な守護大名を滅ぼしていったんだ。

でも，このような守護大名が滅ぼされていく状況に，当時の有力守護であった播磨国守護の赤松満祐は「次に滅ぼされるのは俺かもしれない…」と恐れるようになっていった(赤松満祐の「祐」を「佑」にしたり，部首を「ころもへん」にする者が多いので特に注意！)。

祐

それなら，いっそのこと「滅ぼされる前に将軍ごと殺してしまえ」ばいい。そこで，赤松満祐は「結城合戦の勝利のおもてなしをしたいんで，オイラの自宅にまで来てください」と義教を呼び出し，1441年に将軍足利義教を暗殺してしまったんだ。これを嘉吉の変(嘉吉の乱)という。

史 嘉吉の変(嘉吉の乱)『看聞御記』

(嘉吉元年六月)廿五日，晴。昨日の儀粗聞く。一献両三献，猿楽初時分，内方どゝめく。何事ぞと御尋ね有るに，雷鳴かなど三条申さるるの処，御後の障子引あけて，武士数輩出て則ち，公方を討ち申す。……赤松落ち行き，追懸けて討つ人無し。未練謂ふ量り無し。諸大名同心か，其の意を得ざる事なり。所詮，赤松討たるべき御企露顕の間，遮って討ち申すと云々。自業自得果して無力の事か。将軍此の如き犬死，古来其の例を聞かざる事なり。

(嘉吉元年(1441年)6月)25日，晴れ。昨日の出来事について，およそのことを聞いた。それによると，一杯，二杯，三杯盃が重ねられ，猿楽が開演した頃，赤松の館の奥の方で響きわたるような大きな音がした。足利義教が「何事か」と尋ねられたので，「雷鳴でしょうか」などと三条実雅が答えたりしているうちに，将軍の後ろの障子を開けて，数人の武士が踏み込み，即座に将軍(足利義教)を討ち果たした。……赤松満祐は領国の播磨へ逃れていったが，これを追いかけて討とうとする人もいなかった。その不行き届きは何とも言いようがない。守護大名達は赤松に同調したのであろうか，納得できないところである。結局は，赤松満祐を討とうという将軍義教の企てがはっきりしたので，赤松満祐が先手を打って将軍を討ち果たしたのだという。将軍の自業自得であるが，一体，将軍の無力とだけで済まされようか。しかし，将軍(足利義教)のこのような犬死には，昔からの例として聞いたことがない。)

事件の概要は上記の史料に記してあるけど，これはとんでもない事件だよね。だって，将軍が暗殺されるという信じられないような話だよ！そのため，この事件は赤松満祐が一人でやったものなんだけど，赤松満祐以外にも他の奴が味方しているかもしれないと思った他の有力守護はずっと身動きが取れないでいた。そして，その間に赤松満祐は京都にある自分の屋敷に火を放って，自分の国の播磨に帰っていっちゃったんだ。

トップである将軍が暗殺されたため，幕府はしばらく混乱していたんだけど，当時8歳だった義教の子の足利義勝を7代将軍に就けて，ようやく落ち着きを見せ始める。そして，事件から1ヶ月たって，山名持豊(宗全)を総大将として派遣して，赤松満祐を鎮圧することになるんだ(この赤松討伐で手柄を立てた山名持豊は赤松満祐の領地をほとんどもらい，管領の細川氏と肩を並べるほどになる)。

＜永享の乱・結城合戦後の関東－テキストP33対応－＞

永享の乱により，4代鎌倉公方足利持氏が滅ぼされたため，鎌倉公方は不在となり，その補佐役である関東管領の上杉氏が鎌倉府の実権を握るようになっていった。そして，それから10年以上経って，各地を転々と逃げ回っていた足利持氏の遺児，足利成氏が鎌倉公方に迎えられた(義教に殺される恐れがあったが，義教が嘉吉の変で暗殺されたため，1449年に鎌倉公方に迎えられた)。

ところが，久々に戻ってきてみたら，鎌倉府の状況がどこかおかしい。本来，鎌倉府の実権は鎌倉公方が握っているハズなのに，今は関東管領の上杉氏が実権を握ってしまっている。…これは，おもしろくないよね。そこで，成氏は上杉氏の勢力を一掃するため，当時の関東管領であった**上杉憲忠**を**1454年**に謀殺しちゃったんだ。これを**享徳の乱**という。

おいおいおい。さすがに，こんな関東管領を殺しちゃうような人物を鎌倉公方につけておくのはまずいでしょ。そこで，その時の8代将軍**足利義政**は「成氏を鎌倉公方につけておくのはさすがに問題だ。だから，成氏はクビにして，俺の兄弟の**足利政知**を代わりの鎌倉公方として派遣しよう」って決めたんだ。しかし，成氏からしてみれば「そんなん認めねえよ？俺こそが正しい鎌倉公方だっての」と主張して，**下総**の**古河**という場所に本拠地を移して鎌倉公方を続けたんだ。そのため，これを**古河公方**という。

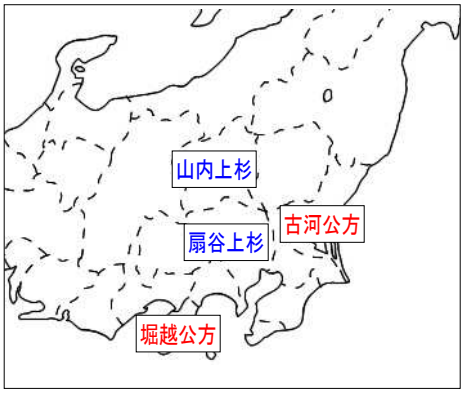
それに対して，義政の派遣した足利政知は，成氏を征伐するため関東に入ろうとしたんだけど，関東の豪族達に「京都の奴は関東の地に入ってくるんじゃねえ」って反発を受けちゃったため，結局関東にまで入れなかったんだ。そのため，やむなく**伊豆**の**堀越**という場所に居を構えたんだ。これを**堀越公方**という。これによって鎌倉公方は**足利成氏**(足利持氏の子)の**古河公方**と，**足利政知**(足利義政の兄弟)の**堀越公方**の二つが出来ちゃったわけだね。

さらに，こうした鎌倉公方を補佐するハズの関東管領上杉氏の中でも対立が激化しちゃって，**山内上杉氏**と**扇谷上杉氏**の二つに分裂してしまったんだ(正確には，もともと上杉氏は一族で関東管領をやっていたのだが，山内・扇谷・犬懸・宅間の4家があった。その中で宅間はすぐに衰退し，犬懸は上杉禅秀の乱で衰退した。その後，残った扇谷が台頭していき，宗家の山内との対立が深刻化していった)。

＜鎌倉公方の覚え方＞
「古河公方＝足利成氏(持氏の子)」
①こが・しげうじを濁音でつなげる
②持氏の子であるのが成氏
「堀越公方＝足利政知(義政の兄弟)」
①ほりこし・まさともを清音でつなげる
②義政の兄弟であるのが政知

このように，関東では全国よりもいち早く戦国時代に突入していたわけだ(戦国時代は応仁の乱(1467～1477)以後から織豊政権の成立(1573 年頃)までを指す)。そして，こうした戦国の世となっていた関東を統一していったのが，**後北条氏**だったんだ。

後北条氏という家柄は，この時期に京都から流れてきたと言われる**伊勢長氏**(**宗瑞**)が祖になる。もともと彼は京都にいたと言われているんだけど，自分の妹が駿河の今川氏に嫁ぐことになったので，それをツテに**今川氏**の家臣となり，興国寺城という城の主になった。でも，野心家の彼はそれだけでは終わらない。いつでも，領土を拡大できるチャンスをうかがっていたんだ。



〔関東の争乱〕

そんな彼に伊豆から一つの重大ニュースが届く。伊豆には堀越公方の足利政知がいたけれども，彼は1491年に亡くなった。すると，その子の**足利茶々丸**が，異母弟やその母親を殺害して，**堀越公方**を継いだというのだ。…これはまたとない機会だよね。そして，ちょうど同じ頃には，京都の室町幕府でも政変が起きていた。管領の**細川政元**が，時の10代将軍**足利義稙**を追い出し，堀越公方足利政知の子であった**足利義澄**を11代将軍に擁立したのだ。これを**明応の政変**というんだけど，茶々丸に殺された弟と母親は，新しく将軍に就いた義澄と実弟・実母にあたる。つまり，茶々丸は将軍義澄の実弟・実母を殺したわけだから，これは伊勢長氏が堀越公方の足利茶々丸を討つ大義名分(正当な理由)になるよね。

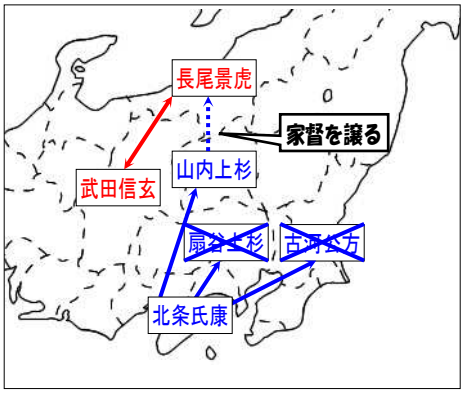
そこで，その足利茶々丸を討つため，伊豆へと出兵し，瞬く間に伊豆を奪い取ってしまったんだ(なお，先ほど説明した明応の政変は早慶レベルの内容なので，茶々丸討伐との関連性も早慶レベルを受験しない生徒は覚えなくてよい)。こうして伊勢長氏は見事に堀越公方を滅ぼし，伊豆を拠点にすることになったわけだ。

でも，伊豆の人々からしてみれば，「今度ここの領主になった伊勢長氏って何者だ？」といった感じで，馴染みが全くないよね。そこで，伊勢長氏はこの伊豆出身で鎌倉幕府の執権となった北条氏にあやかって，北条早雲と名乗ることにしたんだ。この北条氏は，鎌倉幕府の北条氏とは何一つ血縁的につながっていないので，それと区別するため後北条氏と呼ばれる。それゆえ，北条早雲はこの後北条氏の祖ということになるわけだ。そして，家臣団を統制・教育するため『早雲寺殿二十一箇条』という北条氏の家訓を制定したんだ。

その後，相模国(現在の神奈川県)も制圧して居城のある小田原を中心に繁栄させていくんだけど，後北条氏の家系は3代まで名君が続く。早雲の子の北条氏綱がその基礎を固め，その子北条氏康の代に北条氏は飛躍的に発展させることになる。

まず，氏康は川越の戦い(1545～1546)で関東管領の扇谷上杉氏を滅ぼし，もう一つの鎌倉公方である古河公方も撃破。そして，さらにその北に位置する山内上杉氏も圧倒していったんだ。この山内上杉氏の当主であった上杉憲政は「このままでは山内上杉氏は滅ぼされる。上杉氏は室町幕府の関東管領として続いた名家…。この家柄を自分の代で潰すわけにはいかない。せめて，誰かしら有力な人物にこの上杉氏の家督を継いでもらわなければ…」と考え，越後の春日山を拠点に勢力を誇っていた長尾景虎という人物を頼っていったんだ。そして，義に厚い長尾景虎は上杉氏の家督を継ぐことになり，改名することになる。それが甲斐の虎武田信玄との川中島の戦いで有名な，越後の龍上杉謙信だ。

さて，話を後北条氏に戻そう。北条氏康の跡を継いだ，4代目の北条氏政は1590年まで関東の覇者として君臨する。でも，この頃には豊臣秀吉によって全国統一がほぼ成し遂げられていて，秀吉に従わなかった大名は，関東の北条氏政，奥州の伊達政宗しか残っていなかった。そこで，秀吉は天下統一のため，30万もの大軍で北条氏政の立てこもる小田原城を包囲し，兵糧攻めにすることで北条氏を降伏させたんだ(これを小田原攻めという)。なお，この時に，奥州の伊達政宗も小田原まで来て降伏したことで，秀吉の天下統一が完成することになる。



〔後北条氏の台頭〕

［D］応仁の乱（足利義政～足利義尚）－テキスト P32 対応－

足利義教が嘉吉の変（乱）で暗殺されてしまったため，その子供の義勝が 7 代将軍に就任した。でも，この義勝は病弱だったため，2 年後に 10 歳で死んでしまった。そこで，その弟であった足利義政が 8 代将軍に就いたんだ。

この人は，はじめの頃は将軍親政を強め，守護大名の抑圧などを進めたんだけど，途中でそれが挫折すると，それ以降は政治に対するやる気を失ってしまった。そして，その当時の京都などでは疫病が流行っているのに，彼はそれに見向きもせず毎日のように酒を飲み，祖父の義満の真似をして人々を動員し慈照寺銀閣を造らせたり，もうダメダメな政治を行うようになってしまったんだ。

しかも，そんな時に限って彼と妻の日野富子の間にはまだ男の子の跡継ぎは生まれてなかった。もしも，自分が急死などしてしまった場合には，将軍家の跡継ぎなどで問題が起きるかもしれないよね。そこで，すでに出家してしまっていた義尋という自分の弟を呼び出して頼んだんだ。

（義政）「お前さ，俺の次の将軍後継者になってくれねえかな？」

でも，義政は 28 歳で妻の日野富子は 25 歳だから，新しい子供が生まれる可能性もあるし，義尋からしてみれば不安だよね。

（義尋）「えっ？でも兄貴，俺出家しちゃっているんだよ。それに，もしかしていずれ兄貴と日野富子の間に子供も出来るかもしれないじゃないか？」

（義政）「わかっている。でも，でも未だに俺の子供生まれないじゃん。だから，お前に還俗してもらって次の将軍として準備しておいてほしいんだよ。そんで，もし，今後俺に子供が生まれても，お前を将軍に推すから」

（義尋）「…わかったよ。兄貴がそこまで言うなら，俺も還俗して将軍後継者として準備するよ」

こうして，義政の弟の義尋は還俗して足利義視と名乗り，時期将軍として準備を始める。そして，義政は，時期将軍を補佐するため，義視の後見役として管領の細川勝元をつけたんだ。

ところが，僕自身わからないのが，この時の義政の行動なんだよね。何でもう日野富子との間に子供は出来ないって思ってしまったのだろう。そもそも，当時の日野富子はまだ 25 歳で，実は既に一回女の子を産んでいるんだ。だから，再び身ごもる可能性は高いハズだよね。そして，それが翌年本当に起きてしまう。何と義視に次の将軍を約束したその一年後に，義政と日野富子の間に足利義尚という子供が生まれちゃったんだ。…ここで，一番焦ったのは義政だろうね！

（富子）「あんた，喜びな！子供ができたよ，男の子だよ！」

（義政）「お～，やったじゃねえか…って，えっ？…えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

…って感じだ。でも，義政からしてみればすでに義視に次の将軍は約束してしまっている。そこで

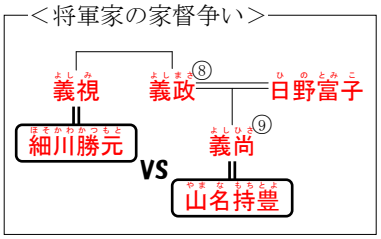
（義政）「いや～，実は次の将軍は義視に約束しちゃっているんだよね…。」

（富子）「…知らないわよ？たとえ，あんたがどんな約束していようが，将軍に子供が生まれたんだから，次の将軍はどんなことがあってもこの義尚よ。」

（義政）「…で，でも，もし義視に断ったら後見役の細川勝元が何て言ってくるか…おろおろ」

（富子）「なに？細川勝元が義視の後見役？じゃあ，それでも，義視がいいって言うなら，あたしはこの義尚の後見役に山名持豊をお願いするからね。」

…ということで，日野富子は義尚の後見役として当時の実力者であった山名持豊（宗全）に頼っていったんだ（山名持豊（宗全）は先ほどの嘉吉の変（乱）で手柄を立て，赤松満祐の領地をほとんどもらい，管領の細川氏並みに勢力を持つようになっていた）。そのため，足利義視を後見する管領の細川勝元と，足利義尚を後見する山名持豊（宗全）の間で対立が激化していったんだ。



でも，将軍家の家督争いだけで済めば良かったんだけど，この当時の三管領の家柄には細川氏以外にも，畠山氏と斯波氏がいたよね。その畠山氏と斯波氏の中でも，それぞれ畠山持国と斯波義健が死んじゃった後に，畠山氏では畠山政長（持国の養子）と畠山義就（持国の実子）が，斯波氏では斯波義敏（義健の養子）と斯波義廉（義健の養子）が，それぞれ家督争いをしていたんだ（室町時代以降に家督争いが激化する原因は，この当時の相続形態が分割相続から単独相続に移行していたことが大きく，家督を継げなかった者は出家したり，主家の家臣にならなければならない運命だった。ゆえに，家督を継げるか継げないかは死活問題であったため，争いが激化したのである）。

そして，それぞれ畠山政長と斯波義敏が細川勝元にその支援を求め，畠山義就と斯波義廉が山名持豊（宗全）にその支援を求めたんだ。こうして，この対立の頂点に火が点いて，細川勝元方（東軍）と山名持豊方（西軍）に分かれて，全国の守護大名をも巻き込んで，京都で起きたのが 1467 年から 1477 年までの 11 年間続いた応仁の乱だ（応仁の乱が起きるまでの政治混乱は『応仁記』に記されている）。

＜応仁の乱の覚え方＞
「人の世ムナしく応仁の乱」
→人の世 ム ナ しく
1　4　6　7

回 応仁の乱ー政道の混乱ー『応仁記』

応仁丁亥ノ歳，天下大ニ動乱シ，ソレヨリ永ク五畿七道悉ク乱ル。其起ヲ尋ルニ，尊氏将軍ノ七代目ノ将軍義政公ノ天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ任セズ，只御台所，或ハ香樹院，或ハ春日局ナド云，理非ヲモ弁エズ，公事政道ヲモ知リ給ワザル青女房・比丘尼達，計ラヒトシテ酒宴淫楽ノ紛レニ申沙汰セラレ，……嗚呼鹿苑院殿御代ニ倉役四季ニカヽリ，普廣院殿ノ御代ニ成，一年ニ十二度カヽリケル。当御代臨時ノ倉役トテ，大嘗会ノ有リシ十一月ハ九ヶ度，十二月八ヶ度也。又彼借銭ヲ破ラントテ，前代未聞徳政ト云事ヲ此御代ニ十三ヶ度迄行レケレバ，倉方モ地下方ヘ皆絶ハテケリ。……

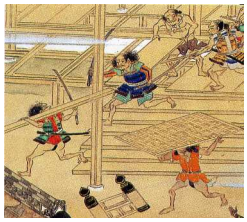
（応仁元年（1467 年），天下は大きく乱れ，これ以後長期にわたって五畿七道（日本全国）全てが戦乱となった。その原因をたどってみると，初代将軍足利尊氏公から七代目の将軍足利義政公が，天下の政務を徳のある管領に任せなかったことにある。もっぱら夫人（日野富子），あるいは香樹院・春日局などという道理もわきまえず，裁判や政治のことも知らない未熟な女房（香樹院）や尼僧（春日局）達が，計画的に酒盛りやみだらな遊びの席を利用して訴訟を取り次いでいる。……ああ，情けないことに鹿苑院殿（足利義満）の治世には，倉役は 1 年のうち，季節ごとに 4 回かけられ，普広院殿（足利義教）の治世になって年に 12 回課税された。ところが，この治世（足利義政の治世）では，臨時の倉役だとして，大嘗会（大嘗祭）のあった 11 月には 9 回，12 月には 8 回も課税された。また，借金を踏み倒すため，これまで聞いたこともない徳政令が，この治世（足利義政の治世）には，13 回まで行われたので，幕府御用の土倉も一般の土倉もみな潰れてしまった。）

この応仁の乱で押さえておかなければならないのは，それぞれ細川方（東軍）・山名方（西軍）に味方した足利氏・斯波氏・畠山氏の面々で，これらは正誤問題などで混乱しないように，片方はゴロで押さえておこう。

＜山名方（西軍）の覚え方＞
「山持ちヨッシー，悲惨なカットなり」
→山持ち ヨッシー 悲惨 カット なり
山名持豊　義　尚　廉　就

さて，この応仁の乱のために全国から多くの守護大名が大軍を引き連れて京都にやってくる。その数は細川勝元方の東軍が 16 万，それに対して山名持豊方の西軍が 11 万。こんな大軍同士が 11 年間も争うわけだから，戦場となった京都はもう丸焦げ。

でも，11 年間も戦っていたら，両軍ともに兵士の数が足りなくなってしまう。そこで，近くの国から農民などをかき集めて，そいつらを簡単に武装させて，略奪や放火などの作戦を行わせたんだ。こうした軽装で各地を身軽に飛び回って活躍した雑兵を足軽と呼び，その様子は右絵の『真如堂縁起絵巻』に描かれている。


〔足軽in『真如堂縁起絵巻』〕

なお，この足軽に対して，当時の文化人ナンバー1 であった一条兼良は『樵談治要』という書物で，「足軽は超過したる悪党」であると述べて批判している。この『樵談治要』は，9 代将軍となった足利義尚の諮問に答える形で 1480 年に書かれたものなんだけど，その中で足軽はタチが悪すぎるから停止させた方がいいって述べているんだ。

足軽の出現『樵談治要』by 一条兼良

一　足軽といふ者，長く停止せらるへき事
……此たびはじめて出来れる足軽は，超過したる悪党也。其故は洛中・洛外の諸社・諸寺・五山・十刹・公家・門跡の滅亡は，彼らが所行也。
（一，足軽という者は永久に禁止されるべき事
…今度（応仁の乱）初めて登場した足軽は，並外れた悪者である。その理由は，京都内外の神社・仏寺・五山・十刹・公家・門跡寺院の衰退は，彼等の仕業である。）

さて，肝心の応仁の乱は結局どうなったのかというと，細川勝元・山名持豊といった総大将が 1473 年に相次いで亡くなってしまった。そこで，2 人が死亡したのちに 8 代将軍の足利義政は「じゃあ，次の将軍はやっぱ息子の義尚ってことで」と決定したので，足利義尚が 9 代将軍に就任することになったんだ。…ということは，東西両軍の総大将もいないし，将軍も決まっちゃったわけだから，守護大名にとっては争っている意味がなくなる。そのため，徐々に京都に集まっていた守護大名も地元に帰っていくようになって，ようやく 1477 年に両軍に和議が成立して応仁の乱は終了したんだ。

論述対策として，最後は応仁の乱の結果を見ていこう。まず 11 年間も争いをしていたわけだから，焼け野原となった京都は荒廃する。だから，人々も京都に住んでいられなくなり，特に公家などの文化人は地方に移住するようになる。これによって，京都の文化が地方に広まるようになるんだ（特に周防・長門の大内義隆は，京都の公家や僧侶などの文化人を大量に招待したので，大内氏の城下町であった山口は「小京都」とか「西の京都」と呼ばれて繁栄した）。さらに，こうした公家勢力などの荘園領主の権威も失墜することになったので，荘園制の解体が進んでいったことも挙げられるね。
また，公家勢力の権威が失墜しただけではなく，応仁の乱で 11 年間も馬鹿みたいに争っていたので，当事者となった将軍（室町幕府）の権威はガタ落ちだし，同じく戦いに参加していた守護大名の勢力も衰退する（これによって，将軍・守護大名の守護在京制による幕府の政治体制も崩壊した）。

＜明応の政変（1493）＞
将軍の権威失墜を象徴する事件として，1493 年に起きた明応の政変が挙げられる。この当時，9 代将軍足利義尚が 1489 年に病死したため，足利義視の子である足利義稙（初め義材）が 10 代将軍に就任した。義稙は応仁の乱で失墜した将軍権威を強化するため，1493 年に河内に出陣していたが，その隙を狙って管領の細川政元はクーデターを起こし，足利義澄（堀越公方足利政知の子）を 11 代将軍に擁立した。この明応の政変で将軍は傀儡化し，細川政元が管領として幕府の実権を握った。

こうして，11 年間も京都で争っていた守護大名たちは，自分の領国へと帰っていくんだけど，その 11 年間自分が留守にしている間は，守護の代わりの守護代に領国を任せていた。そして，守護大名が「やった～，11 年ぶりの故郷だ～！お前ら長らく待たせちゃったな，すまんすまん！」って帰ってくるわけだけど，守護代からしてみれば「はっ？お前誰だよ？11 年間も京都にずっといて，地元にいなかったくせに何が今更お帰りだよ？」って感じだ。
そう。この応仁の乱を機に多くの守護大名が没落し，守護代や有力な国人に領国を乗っ取られてしまったんだ。このような下の者が上の者を倒すことを下剋上というんだけど，こうした下剋上の風潮が高まって，この応仁の乱を機に戦国時代が幕を開けていくんだ。

［E］土一揆(徳政一揆)－テキストP32対応－

さて，ここからは「一揆」の説明に入っていこう。「おいおい，何で室町幕府の話から，急に一揆の話に入るんだよ？」って思っただろう。ところが，どっこい。実はこの一揆などの社会経済史は政治史と密接にリンクしているんだ。だから，政治史を理解した上で，この一揆の説明をした方が非常にスムーズに頭に入ってくる。

［中世社会経済史］でも述べたけど，鎌倉・室町時代になると農業生産力が向上し，生活にゆとりの生まれた農民たちが，商品作物を栽培したり，手工業品を生産するようになり，諸産業が発達した。そして，彼らは生産したそれらの商品を市場で売買することによって，貨幣を手にするようになり，貨幣経済が浸透するようになったよね。ということは，日照りなどによって凶作になり，年貢を納めるのが難しい場合，農民たちはどうするか？それを工面ために金融業者の**土倉**・**酒屋**に行ってお金を借りるんだ。

でも，土倉・酒屋も担保なしでは貸してくれない。例えば，質屋さんで100万円を借りたいとしたら，100万円の価値のあるもの(車・時計など)を預ける形で，100万円を借りるでしょ？お金を借りる時には，質屋さんにおける質草(担保のこと)が必要になるわけだ。でも，農民たちが質草にできるものといえば，自分の田畑ぐらいしかない。だから，農民たちは自分の田畑とかを質草に入れてお金を借り，その借金がどんどん膨らんでいったんだ。

＜畿内で税が重かった理由(論述対策)＞

観応の擾乱が終わった直後の**1352年**，室町幕府は観応の**半済令**を発布して，守護に全国の荘園・公領の年貢の半分を徴収する権限を認めた。さらに，足利義満が3代将軍に就任した**1368年**に出された応安の**半済令**では，皇室・寺社・摂関家領を除いて，土地そのものを守護と荘園領主で折半することが認められた(事実上の下地中分にあたる)。つまり，荘園・公領の半分は守護のもの，半分は荘園領主のものということになり，貴族・寺社などの荘園領主は，半済令によって年貢の半分を守護に持っていかれてしまうわけだ。

しょうがないので，貴族・寺社などの荘園領主は残っている荘園・公領から年貢を徴収するしかない。ただ，その荘園・公領は各地に散らばっているので，地方の国人層が現地を管理していて，都にいる貴族・寺社などの「権威」が物をいう時代ではなくなっていた。そのため，国人層は年貢を滞納するようになったよね。そこで，荘園領主は少しでも年貢を確保するために，荘園の経営を守護に委ねる代わりに，一定額の税の納入を請け負わせる**守護請**を行うようになった。まあ，わかりやすく言うなら，荘園領主が「最近，うちの国人層の連中が年貢を納めてくれない。だから，守護よ？わしらの代わりに年貢を徴収してくれんかの？その代わりに，その徴収した年貢の一部は守護の収入にして構わないから」と守護に荘園の経営を任せるようになったわけだ。

つまり，単純計算するとこうなる。貴族・寺社などの荘園領主は，半済令によって年貢の半分を守護に持っていかれる。さらに，守護請によって残り半分の年貢の一部も守護に持っていかれることになる(こうした半済令・守護請によって，守護が荘園領主の荘園・公領に勢力を伸ばしていくことを守護の荘園侵略という)。こうして，地方から納められるハズだった荘園領主の年貢収入は減少してしまったわけだ。

じゃあ，荘園領主はどうやって収入を確保すればいい？こうなったら，自分たちのある程度目が行き届く範囲の畿内を中心に税金をかけるしかない。こうして，守護の荘園侵略によって，収入の減少した荘園領主は畿内を中心に増税をするようになったんだ。そして，この他にも幕府が畿内を中心に関銭・津料などをかけてきたというのもあるね。だから，畿内に住む人々は他の地域よりも税の負担が多くてキツかったわけだ。

上記の理由から，畿内では年貢の負担量が多く，それを納めるのが難しいため，未納の年貢が債務化されていっていた。そして，土倉・酒屋から借金をするようになり，借金を返せずに土地を失う農民が増加していったんだ。

そして，この時代には畿内を中心とした惣村により農民達が結びついている。そこで，みんなで村民の祭祀組織である宮座を中心に話をするんだ。

（村民A）「実はオラ～，今借金で追われてるださ～。」
（村民B）「おめえもか？実はオラもだ～」
（村民C）「おう，オラもオラも」

村民たちは惣村内で結びついているから，情報を共有し合っているわけだ。

（村民A）「もう借金返すのは無理だっぺな。みんなで夜逃げでもすっぺか？」
（村民B）「そうだっぺな～。そうすっぺかな」
（宮　座）「いや，みんな聞いてくんろ。みんな借金で困ってるんだったら，みんなで土倉とか酒屋を襲っちまえばいいでねえか。」
（村民C）「そっ，そうだ，そうだ。みんなで襲っちまえばいいだ」
（宮　座）「じゃあ，今度みんなで土倉・酒屋襲っぺよ」

こうして，彼ら土民はみんなで土倉・酒屋を襲い，借金の証文を破り捨てて，借金をなかったことにしたり，すでに売り払ってしまった土地を取り戻したりするんだ。こういった実力で債務を破棄すること，つまり勝手に借金をチャラにしてしまうことを私徳政という（本来，徳政とは税金免除などの善政のことをいったが，中世以降は債務の破棄を指すようになった）。

でも，これは幕府が認めたわけでなく，勝手に借金をチャラにしただけ。もしかして，幕府がそれを認めず，いつかまた借金を請求されてしまう可能性もある。そこで，私徳政で勝手に借金をチャラにした後に，今度は幕府に正式に徳政令を出せと要求するんだ（これを徳政一揆という）。このような一般庶民のことを，為政者（支配者層）は土民と軽蔑的に呼んでいたため，土民（一般庶民）による一揆を土一揆というんだ。

なお，この他にも一揆にはいろいろ種類があって，国人が守護の支配に対して抵抗する国人一揆，国人を中心に土民などが加わる国一揆，浄土真宗（一向宗）の信者による一向一揆，日蓮宗（法華宗）の信者による法華一揆がある。

＜一揆の種類＞
土　一　揆…土民（一般庶民）による一揆
国人一揆…国人（地方武士）による一揆
国　一　揆…国人を中心に土民も加わった一揆
一向一揆…浄土真宗（一向宗）信者による一揆
法華一揆…日蓮宗（法華宗）信者による一揆

＜代替わりに徳政一揆が起きた理由＞

農民たちは「地発し」といって，自分で開墾した土地には自分が命を吹き込んだという感覚を持っている。だから，たとえ，その土地が売られて他人のものになってしまっても，将軍・天皇の代替わりや天変地異などが起こると，その土地と自分が命を吹き込んだ関係が復活して，自分のもとに戻ってくるという観念があったんだ。

正長の土一揆が起きる 1428 年は，4 代将軍の足利義持が亡くなって，6 代将軍の足利義教が将軍に就いた代替わりの年だった。また，1428 年は後花園天皇が即位した天皇の代替わりの年でもあり，疫病が流行り，全国的に飢饉の年でもあった。

これらが同じ年に起きたのは偶然だけども，徳政一揆が 1428 年に起きたのは偶然なんかじゃない。疫病・飢饉が流行り，足利義教が将軍に就任し，後花園天皇が即位した 1428 年は，自分たちの土地が戻ってくる「代替わり」の歴史的な年だった。そのため，土民たちは「代替わり」である 1428 年に，徳政（債務の破棄）を求めて畿内全体で徳政一揆を起こしたんだ。

　© 不許複製禁転載

こうした畿内を中心に，惣村を母体にした土民(一般庶民)が起こした土一揆で，日本で初めて起きたのが 1428 年の正長の土一揆(徳政一揆)だ。

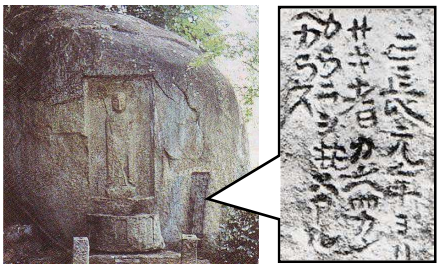
これは，1428 年に 6 代将軍に足利義教が就任した「代替わり」をきっかけに，近江国坂本の馬借(運送業者)が一揆を起こして，自分たちで借金を帳消しにしていったことが始まりだった。そして，これが畿内全体へと広がっていき，各地で土民(一般庶民)が土倉・酒屋・寺院を襲って(寄付などでもらったお金(祠堂銭)を貸し付けて利益を得ていたため寺院も襲撃された)，借金の証文を破ったり，自分の取られた土地などを奪い返していったわけだ。でも，あまりにも規模が大きくなりすぎてしまったため，幕府も管領の畠山満家を出動させて，これを鎮圧したんだ。なお，この正長の土一揆については，一条兼良の子で興福寺の僧侶尋尊が記した『大乗院日記目録』に記されている。

Ⓐ 正長の土一揆『大乗院日記目録』by 尋尊(興福寺の僧侶で一条兼良の子)

(正長元年)九月□日，一天下の土民蜂起す。徳政と号し酒屋・土倉・寺院等を破却せしめ，雑物等悉にこれを取り，借銭等悉くこれを破る。官領これを成敗す。凡そ亡国の基，これに過ぐべからず。日本開百以来，土民の蜂起是れ初めなり。

((正長元年(1428 年))9 月□日。一天下(京都周辺)の土民(支配者が見下した一般庶民のこと)が一斉に蜂起した。「徳政だ」と叫んで，酒屋・土倉・寺院(祠堂銭などの高利貸をしていたため襲撃された)などを襲って破壊し，質入れした物品などを思うままに略奪し，借金証文などを全て破り捨てた。管領(畠山満家)がこれを鎮圧した。総じて国が亡びる原因として，これ以上大きいものはない。日本の国が始まって以来，土民達が立ち上がったというのは，これが初めてのことである。)

管領が鎮圧にあたったように，正長の土一揆で幕府は徳政令を認めなかったんだけど，その正長の土一揆のなかで例外的に徳政令が認められたところもある。それが近江国と大和国だ。この二つの地域では一揆の勢力が盛んだったため，大和国の守護である興福寺が例外的に徳政令を認めている。そのため，その大和国柳生にある「柳生の徳政碑文」には「正長元年(1428 年)ヨリ前ハ神戸四ヶ郷に負い目(負債)アルベカラズ」と，大和一国に限り徳政が認められたという私徳政の宣言文があるんだ。



〔柳生の徳政碑文〕

Ⓒ 私徳政の宣言『柳生の徳政碑文』

正長元年ヨリサキ者カンヘ四カンカウニヲヰメアルヘカラス

(正長元年(1428 年)以前については，神戸四ヶ郷(大柳生・小柳生・坂原・邑地の四郷)に負い目(負債)はないものとする。)

でも，正長の土一揆はそれだけでは終わらなかった。正長の土一揆の影響を受けて，播磨国(現在の兵庫県西南部)でも 1428 年に国人や農民たちが一揆を起こしたんだ。この時の一揆は，いったん収まって，彼らは解散した。でも，その翌年の 1429 年には「播磨国内には侍の居住は許さない」と赤松氏家臣の国外追放という政治的要求を掲げて再び蜂起し，播磨国の赤松氏の家臣たちに攻撃してきたんだ(この正長の土一揆が波及して 1429 年に播磨国で起きたものを播磨の土一揆という)。この蜂起した理由はわかっていないんだけど，おそらく赤松氏の家臣たちが正長の土一揆の際に，徳政令の発布かそれまでの悪政の是正などを約束したのだろう。そのため，一度農民たちは解散したわけだが，約束を実現しないためその翌年に再び蜂起したのだと考えられる。まあ，最終的には播磨国守護の赤松満祐が出動して鎮圧しているけどね。

Ⓐ 播磨の土一揆『薩戒記』

（正長二年正月二十九日）……或人曰はく。播磨国の土民，旧冬の京辺の如く蜂起す。国中の侍を悉く攻むるの間，諸庄園代加之守護方の軍兵，彼らの為に或いは命を失ひ，或いは追落さる。一国の騒動希代の法なりと云々。凡そ土民，侍をして国中に在らしむべからざる所と云々。乱世の至なり。仍て赤松入道発向し了んぬ者。

（（正長二年（1429 年）正月 29 日），……ある人が次のように語った。「播磨国の土民が，去年冬の京都周辺（正長の土一揆）と同じように，一斉に立ち上がった。国中の侍をそろって攻撃したので，国内の諸荘園代官ばかりか守護方の軍兵（赤松満祐の治める守護方の兵士）は，土民らのために，ある者は殺され，ある者は追い払われてしまった。一国の騒動としては，世にも珍しい例であるという。だいたい土民は侍を国の中にいさせないのだとも言っている。乱世も極まったものだ。このため，播磨国守護赤松満祐が京都から出陣した」と語った。）

さて，播磨の土一揆（1429）を鎮圧した播磨国守護赤松満祐って，どこかで出てきた人物だよね。そう，この赤松満祐といえば，こののち，4 代将軍の足利義教による守護大名抑圧策を恐れて，1441 年の嘉吉の変（乱）で足利義教を暗殺してしまった人だ。この嘉吉の変によって，6 代将軍足利義教に代わって 7 代将軍足利義勝が就任することになるんだけど，…これも将軍が交替した「代替わり」になるよね？そのため，土民（一般庶民）たちは「代替わりの徳政」を要求して再び一揆を起こしたんだ。それが嘉吉の変（乱）と同年の 1441 年に起きた嘉吉の土一揆（徳政一揆）だ。

これは，正長の土一揆（1428）と同じように近江国から起きたんだけど，正長の土一揆のことを「先例」だと称している。正長の土一揆（1428）・嘉吉の土一揆（1441）のどちらも，将軍の「代替わり」がきっかけだったよね。だから，正長の土一揆で「代替わり」を契機に徳政令の発布を要求した先例があるのだから，嘉吉の土一揆でも「代替わり」を契機とした徳政令の発布を要求して，その行動を正当化しようとしたわけだ。

ただ，足利義教を暗殺した赤松満祐を鎮圧するため，幕府軍は播磨に向かっており，幕府軍は京都にほとんどいなかったんだよね。それを計算した上で土民たちが土一揆を起こしたため，幕府は侍所を出動させたものの，鎮圧することはできなかった。そして，地侍や土民の勢いに押されて，幕府は初めて徳政令を発布することになり，ようやく一揆は収まることになったのだ（はじめ幕府は山城国だけに徳政令を発布したが，そののち再度の要求に押されて全国的な徳政令の発布を認めた）。

Ⓐ 嘉吉の土一揆『建内記』

（嘉吉元年九月三日）…近日，向辺の土民蜂起す。土一揆と号し，御徳政と称して，借物を破り，少分を以て押して質物を請く。縡江州より起る。…今日，法性寺の辺に此事有りて火災に及ぶ。侍所多勢を以て防戦するも猶承引せず。……今土民等，代始に此の沙汰は先例と称すと云々。言語道断の事なり。

（同十日）…今度土一揆蜂起の事，土蔵一衆まず管領に訴え千貫の賄賂を出す。

（同十四日）…定む，徳政の事。…右，一国平均の沙汰たるべきの旨，触れ仰せられ訖んぬ。

（（嘉吉元年（1441 年）9 月 3 日）…最近，京都周辺の土民が蜂起した。「土一揆だ」と叫んで，徳政と称して借金を破棄し，少しの金銭で質物を引き出した。このことは江州（近江国）より起こった。…今日，法性寺（京都市東山区にあった寺院）の周辺でこの事があって火災に至った。侍所は多くの兵を動員して防戦したがやはり収められなかった。……今土民たちは将軍の代替わり（6 代将軍足利義教から 7 代将軍足利義勝への代替わり）の最初の年に徳政を行うのは先例となっているという（正長の土一揆は，4 代将軍足利義持が病死して 6 代将軍足利義教が就任したことを契機として起きた。このことを先例だと称している）。全くけしからんことである。

（9 月 10 日）…今回の土一揆で暴動が起きたことを，土倉方一衆（土倉の代表的組織で一種の職種別結合）はまず管領（細川持之）に訴え，1000 貫の賄賂を渡した。

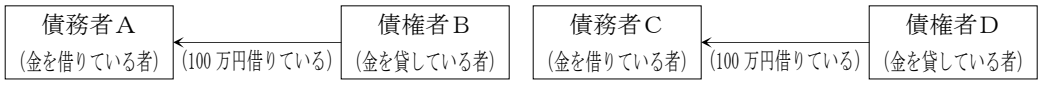
（9 月 14 日）…定む，徳政令のこと。右，山城国に一国平均に徳政令を発布するとの内容が，命ぜられてしまった。）

嘉吉の土一揆に際して，室町幕府は初めて徳政令を発布してしまった。でも，こういうのを一回認めてしまうと，歯止めが効かなくなってしまうんだよね。土民たちも，土一揆を起こせば再び徳政令が出されるんじゃないか，と考えるようになるしね。

そのため，この嘉吉の土一揆で徳政令を発布して以降，幕府はたびたび徳政令を出すようになってしまったんだ。ただ，徳政令が出されると，借金をしている人々はチャラになるけど，逆に借金を貸している人々にとっては非常に痛いことになる。そのため，この徳政令が乱発されたことにより，金融業者の**酒屋**・**土倉**は大打撃を受けてしまったんだ。そして，酒屋・土倉が痛手を被ると，彼らから**酒屋役**・**倉役**(**土倉役**)といった営業税を徴収している幕府も痛手を食うことになる。そりゃあ，酒屋・土倉が破産しちゃったら，酒屋役・倉役といった幕府の収入も減少しちゃうからね。

そこで，幕府はこの徳政令を使って商売をすることを考えた。それが**分一銭**というもの。これは，債権額・債務額の 5 分の 1 または 10 分の 1 を分一銭として幕府に納入すれば，債権者の徳政の適用を免除してあげたり，債務者の債務を破棄してあげるというもの。…と，言ってもイマイチよくわからないよね。そこで，以下のような関係があったとしよう。

＜債務者・債権者の関係＞



借金をしている債務者Aは債権者Bに借金を返すアテがないので，幕府に徳政令を出してもらいたい。そこで，幕府はこれを利用して取引をするんだ。

債務者A「お願いしますだ！オラたち借金で首が回らなくなっちまって，一揆でも起こそうかなと思ってるでやんす。なので，徳政令を出してもらいてえんだすだ。」

幕　　府「ふうむ。んで，お前はいくら借金しているんだ？」

債務者A「え～と，100 万円でやんす」

幕　　府「へ～。じゃあ，そうだな…それの 20 万円(債務額の 5 分の 1 にあたる)or10 万円(債務額の 10 分の 1 にあたる)の手数料(**分一銭**)を幕府に納めたら徳政令出してやるぜ？」

これで，債務者Aが幕府に分一銭にあたる 10 万円を納めると，徳政令が出され債権者Bに対する借金が帳消しになる。でも，問題はそれだけじゃなく，徳政令は全体的に出されるから債務者Cと債権者Dにも，その徳政令が適用されてしまうんだ。

債権者D「ちょっと待ってくださいよ！徳政令なんか出されちゃったら，僕が債務者Cに貸している 100 万円もチャラになっちゃうじゃないっすか！」

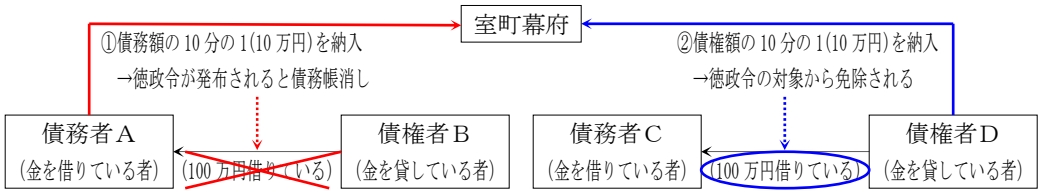
幕　　府「ふうむ。確かにお前もそれでチャラになっちゃうのは痛いよな。」

債権者D「お願いです！どうか私だけは徳政令の対象にならないようにしてもらえないですか？」

幕　　府「じゃあ，その債務者Cに貸している債権額(貸している額)の 5 分の 1(20 万円)か or10 分の 1(10 万円)を幕府に納めたら，お前だけは徳政令の対象から免除してやるよ。」

このように，幕府は債務額・債権額の10分の1ないし5分の1にあたる手数料(**分一銭**)を納めれば，「徳政令を出してやるよ」とか「お前だけは徳政令の対象から外してやるよ」といったことで儲けるようになっていったんだ…。もう末期としか言いようがないけどね。

＜債務者・債権者の関係＞



［F］自治要求一揆－テキスト P32 対応－

これから説明する**山城の国一揆**と**加賀の一向一揆**は，今までの土一揆とは毛色が違う。今までの一揆は，土民(一般庶民)が徳政令の発布を要求した一揆だったけど，この二つはそれぞれの勢力が自治(自分たちで政治を行うこと)を要求する形で起こした一揆なんだ。

1467 年に起きた応仁の乱では，将軍家の足利氏，管領家の斯波氏・畠山氏の家督争いが原因だったけど，その畠山氏の家督争いをしていたのが**畠山政長**と**畠山義就**だった。ところが，この 2 人…，1477 年に和議が成立して応仁の乱が終了しているのに，その後もずっと「どっちが家督を継ぐか勝負だ」って，8 年間も南山城で家督争いを続けていたんだ…(京都がある山城国は北山城と南山城の 2 つがあり，幕府があるのが北山城で畠山氏が争っていたのは南山城)。いい加減もう諦めろよって感じだけどね…。

これは畠山政長・義就本人たちは大問題だけど，どちらにも属していない南山城の国人たちからしてみれば迷惑な話だよね？「お前等いつまで争っているんだよ。いい加減にしろよ」って感じだ。そこで，**1485 年**に南**山城**の**国人**や**土民**がみんなで集まって，**畠山政長**と**畠山義就**の軍勢を南山城から追い出すため立ち上がったんだ(これを**山城の国一揆**という)。なお，これって下の者が上の者を追放するわけだから**下剋上**になるよね。

畠山勢を南山城から追い出した国人たちは，畠山政長・義就両軍が再び山城国に進出することを拒否，寺社本所領の還付(畠山両軍が戦費調達のため寺社領・公家領の荘園を接収していたが，それら荘園を元の寺社領・公家領に還すということ)・**新関**の廃止(畠山両軍が戦費調達のため新しく設置した関所を撤廃するということ)，一揆に加わった農民達の年貢を軽減することなどを自分たちで決定した。

さらに翌年の 1486 年には，国人たちが宇治**平等院**に集まって，南山城を自分たちで治めていくために，**国掟**(**国中の掟法**)というルールを制定し，国人たちの中から 36 人で構成される**月行事**という中心メンバーを決定したんだ(その後，畠山政長を滅ぼした細川政元が新しい守護を置きたいと要請してきたので，幕府の支配を容認する形で伊勢貞陸を新守護として迎え入れ，**8 年間**続いた国人たちの自治は終わった)。なお，山城の国一揆については，興福寺の僧侶**尋尊**らが記した『**大乗院寺社雑事記**』に載っている(尋尊は正長の土一揆について記した『大乗院日記目録』を著した人物でもある)。

Ⓐ 山城の国一揆『大乗院寺社雑事記』by 尋尊(興福寺の僧侶で一条兼良の子)ら

(**文明十七年**十二月十一日)一，**今日山城国人集会す**。同じく一国中の**土民**等群集す。今度**両陣**の時宜を申し定めんが為の故と云々。然るべきか，但し，又**下極上**の至なり。

(同十七日)……自今以後に於いては両**畠山**方は国中に入るべからず。本所領共は各本の如くたるべし。**新関**等一切これを立つべからずと云々。珍重の事なり。

(文明十八年二月十三日)一，今日山城国人，**平等院**に会合す。**国中の掟法**猶以てこれを定むべしと云々。…

((文明十七年(**1485 年**)12 月 11 日)一，今日，**山城**の**国人**が集会をした。同じく山城国中の**土民**達が群れ集まった。今度の(畠山)両陣営(**応仁の乱**後も引き続き対立していた**畠山義就**軍と**畠山政長**軍)の処理を相談して決めるためであるという。もっともなことであろう。ただし，これは**下剋上**が極まったものである。

(文明十七年(1485 年)12 月 17 日)……今後，**畠山**両陣営は山城国内に入ってはならない。荘園領主が支配する荘園などの領地はそれぞれ元通りとする。**新関**(新しい関所)などを設置することは一切禁止するという。めでたいことである。

(文明十八年(1486 年)2 月 13 日)一，今日，山城の国人が宇治**平等院**で会合した。山城国中を統治するための掟(**国掟**)を定めるのだという。……)

山城の国一揆は，応仁の乱から続く家督相続が原因にあった。室町時代になると，嫡子による単独相続が一般化し，家督を継げる者が一人だけになってしまっていた。そのため，家督相続争いが絶えなくなるわけだけど。これは他の地域でも頻発するようになる。

そして，それは加賀国の守護大名富樫氏の中でも起きていたんだ。この当時，加賀国では兄の富樫政親と弟の幸千代が，応仁の乱からずっと家督相続をめぐって争っていたんだけど，どうしてもこの戦いに勝利したい政親は，開けてはいけない「パンドラの箱」を開いてしまう。その「パンドラの箱」こそが浄土真宗（一向宗）の信者による一向一揆だったんだ。

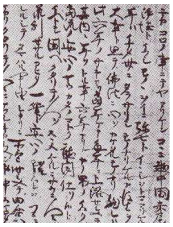
＜浄土真宗の広まり（文化史で学習する箇所）＞

鎌倉時代に親鸞が開いたものに浄土真宗という宗派がある。浄土真宗は，阿弥陀如来を信じ，「南無阿弥陀仏」と念仏をひたすら唱えれば救われるという教えであったことから一向宗とも呼ばれる（一向とはひたすらという意味）。

〔蓮如〕

その浄土真宗の中で本願寺派というグループが室町時代にかけてブレイクしていくんだけど，その火付け役となったのが本願寺８世法主の蓮如という僧侶なんだ。

1471 年，蓮如は北陸地方に赴いて，越前国（現在の福井県）に設けた吉崎道場という拠点を中心に布教を始めた。でも，蓮如の教えが難しかったためか，初めは人々にあまりウケなかった。そこで，誰でもわかるように，念仏の教えをかな文字まじりの平易な文書にしてみたんだ（これを御文という）。そしたら，これがきっかけとなって浄土真宗は北陸地方で爆発的に大ヒット。


〔御文〕

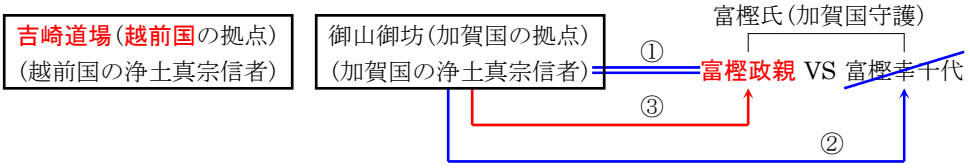
瞬く間に加賀国（現在の石川県）などにも広がっていき，各地の惣村に「講」と呼ばれる浄土真宗を信仰することで結ばれた集団が組織されていったんだ（のちに守護大名や戦国大名と対立し，浄土真宗（一向宗）信者による一向一揆が各地で多発することになる）。

そして，この一向一揆の勢力を利用と考えたのが加賀国の富樫政親だった。弟の幸千代との家督争いで自分に味方してくれれば，浄土真宗のことを優遇すると約束して，浄土真宗の信者に援助を求めたんだ。まあ，20 万人にものぼる浄土真宗の信者を味方につければ勝利は確実だからね。ただ，越前国にいた蓮如はもちろん反対したんだけど，加賀国の指導者はそれを無視し，結局政親の味方してしまう。こうして，1474 年に富樫政親は幸千代を滅ぼして，加賀国の守護となることに成功したんだ。

ただ，その後，浄土真宗の信者は優遇されていることを逆手にとって，横暴などを繰り返すようになってしまった。そこで，富樫政親は一向宗を弾圧しようとしたんだけど，これに一向宗がブチ切れて，今度は富樫政親の高尾城を 20 万の一揆勢に取り囲まれてしまったんだ（9 代将軍の足利義尚は越前国の守護朝倉敏景を援軍として派遣したが多勢に無勢の状況だった）。その結果，攻め滅ぼされた富樫政親は城で自害し，名目上の守護として富樫泰高がつけられることになったんだ（この 1488 年に起きた浄土真宗（一向宗）門徒による一揆を加賀の一向一揆という）。

＜加賀の一向一揆＞

①蓮如＝吉崎道場（越前国）を拠点に，御文（平易な文書）による布教で北陸地方を中心に信者を拡大
②各地の惣村に「講」とよばれる集団を組織し，守護大名・戦国大名などに対して蜂起（一向一揆）



Ⓐ 加賀の一向一揆『蔭涼軒日録』

（長享二年六月二十五日）……今晨，香厳院に於いて叔和西堂語りて云く，今月五日越前府中に行く。其れ以前越前の合力勢賀州に赴く。然りと雖も，一揆衆二十万人，富樫が城を取り回く。故を以て，同九日城を攻め落さる。皆生害して，富樫家の者一人これを取立つ。

（（長享二年（1488 年）6 月 25 日）……今朝，香厳院で叔和西堂（禅僧）が次のように話してくれた。「私は今月 5 日に越前の府中に行った。この日より前に越前の守護朝倉氏の援軍（足利義尚の派遣した朝倉敏景の援軍）が賀州（加賀国（現在の石川県））へ向かって出発していた。しかし，一向一揆の軍勢 20 万人が富樫氏の高尾城を包囲した。そのため今月 9 日には城は攻め落とされ，城中の富樫一族の者はみな自害してしまった。そこで，一向一揆側は富樫一族の者一人（富樫泰高）を加賀国の守護に取り立てた。」）

こうして，加賀国は「百姓の持ちたる国」として，浄土真宗（一向宗）の信者を中心に百姓たちによる約 100 年間もの自治が行われることになるんだ。まあ，1580 年に織田信長の家臣柴田勝家に鎮圧されることになるけどね。

Ⓒ 加賀の一向一揆『実悟記拾遺』

泰高ヲ守護トシテヨリ，百姓トリ立テ富樫ニテ候アヒダ，百姓等ノウチツヨク成テ，近年ハ百姓ノ持タル国ノヤウニナリ行キ候。

（富樫泰高を守護としてからは，百姓が富樫氏において取り立てた人物なので，百姓等の中で力が強くなって，最近では，加賀国は百姓が支配している国（約 100 年間の百姓による自治が続いた）のようになってしまった。）

さて，これで正長の土一揆（1428）・播磨の土一揆（1429）・嘉吉の土一揆（1441）・山城の国一揆（1485）・加賀の一向一揆（1488）の説明はお終いだけど，全部で 5 つもの一揆と年号を覚えるのはキツいだろう。そこで，この 5 つの一揆と年号を 1 つのゴロで覚えてしまおう。

以下のゴロは，柳生の徳政碑文のように「ブラック企業に入社した新入社員が，仕事がキツくて暴れてやろうかな，という気持ちが石に刻まれている」とイメージしてくれるとよいだろう。

＜一揆の覚え方＞

「石には初任給は良いがキツイし反抗や～～と書かれている」

→石には　初　任給　は　良い　がキツ　いし反抗　や　～～　と書かれている

1428　正長　29　播磨　41　嘉吉　1485　山城　88　加賀

なお，このゴロを覚えることで，政治史における将軍の代替わりの年度や事件も覚えることができる。具体的に述べると，正長の土一揆（1428）の同年に「足利義持→足利義教の代替わり（1428）」が起きているし，嘉吉の土一揆（1441）の同年に「足利義教→足利義勝の代替わり＝嘉吉の変（乱）（1441）」が起きていて，どちらも 1441 年と「嘉吉」という元号の共通点でつなげることができるよね。

＜一揆・代替わりの関係＞

「正長の土一揆（1428）」…「足利義持→足利義教の代替わり（1428）」

「嘉吉の土一揆（1441）」…「足利義教→足利義勝の代替わり（1441）＝嘉吉の変（乱）」